

チカラミナギル本のカズカズ

書評 book review

『生殖技術 不妊治療と再生医療は社会に何をもちたすか』

柘植あづみ 著/みすず書房 3200円

体外受精や顕微授精などの生殖技術が、不妊カップルにとって「福音」として喧伝され、体外に取り出された卵子や受精卵は、再生医療研究への道を開いた。が、その生殖技術は多くの問題を内包し、また生み出していく。医療自体のリスク、代理出産や提供卵子・精子における家族定義の複雑さ、依頼者と提供者の社会的・経済的格差、卵子の資源化、商品化、政治性、生命倫理、法律、経済まで、生殖技術がさまざまな問題を抱えていることを、著者は広い視野から鋭く指摘する。

卵子を提供する人と受け取る人は「何重にも生じる優位と劣位の捻じれの中に位置」づき、「この関係は、女性の連帯ではなく分断」であり、それを防ぐには、さまざまな立場の人たちが「意見も情報も交わせる必要がある」との見解には納得だ。不妊への偏見や社会・経済的格差が、「意思決定」や「選択」にいかにか影響しているかの深い考察は、「自己決定権」の意味を問い直させてくれる。(リ)



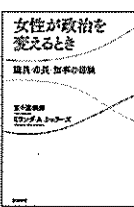
『女性が政治を変えるとき 議員・市長・知事の経験』

五十嵐暁郎、ミランダ・A. シュラーズ 著/岩波書店 3500円

なぜ日本は女性が政治的決定の場に少ないのか。本書は世界との比較から日本の状況を考察するとともに、全国約50人の女性の地方議会議員、首長、国会議員へのインタビューで構成される。

1975年当時は各国の女性議員比率は日本と大差なく、その後の歩みが違うという。しかし日本でも変化は起きている。1989年の参議院議員選挙の「マドンナ旋風」、その後は「変革を掲げる政治家が女性候補を変化のシンボルとして用いた(小泉チルドレン、小沢ガールズのように)。

著者は女性の政治進出の背景として、①利益誘導ではなく、命や生命を大切にしているライブラリーポリティクス課題が浮上したこと②女性の教育機会や社会的経験の拡大③グローバルな女性運動の影響④有権者の好意的投票行動と分析する。森山真弓(元法務大臣)から嘉田由紀子(滋賀県知事)まで50人のインタビューは、状況を切り開いてきた女性たちの思い・決断が分かり感動する。(衣)



『市民がつくった電力会社 ドイツ・シェーナウの草の根エネルギー革命』

田口理穂 著/大月書店 1700円

南ドイツの人口約2500人のシェーナウ市で、チェルノブイリ原発の事故をきっかけに市民有志が始めた反原発運動から電力会社が始めた反原発運動から電力会社が始めた。本書は、どのようにして市民運動から電力会社の設立に至ったのか、シェーナウ電力会社の現状と展望をレポートする。

1987年、「原子力のない未来を考える親の会」が発足、まず市民に省エネを呼び掛けることから始め、すべての原発を止め100%再生可能エネルギーにするというビジョンを実現するために何をすべきかを次々と考え出してきた。

それまでシェーナウ市の電力供給を握っていた大手電力会社(ラインフェルデン電力会社)に対し、市から電力の供給権を得て、送電線を買収するまでのあの手の攻(アイデア!)が興味深い。日本でも発送電分離、電力市場の自由化がようやく議論され始めた。制度の違いからシェーナウにそのままならうわけにはいかないが、触発されることは大いにある。(い)



(本の価格はすべて税抜きです)

Music review

沖縄の海と空から



『新しい世界』 知花竜海 2300円 (税込み) 赤五レーベル AGLC-2001

文 ● 岩崎真美子(ライター)

知 花竜海の音楽に初めて触れたのは、2004年のことだった。この年8月の沖縄国際大学の米軍ヘリ墜落事件に対して、彼が「DUTY FREE SH OPP」名義で、カクマクシャカと共に発表した『民のドミン』という曲をインターネットのフリーダウンロードで聴いたのだ。ヘリの爆音のような重低音と共に歌われる怒り、怒り、怒り。胸をえぐるようなメッセージにただ圧倒された。知花竜海は06年から沖縄で行われている「ピース・

ミュージック・フェスタ」の中心人物でもある。07年と10年に辺野古の浜で行われた際に私も観客として参加したが、基地容認派と反対派に分断された地元の人々のところに、彼ら若い世代が足繁く通い、イデオロギーや歴史を超える人と人とのつながりをつくり出したことを知り、胸を熱くした覚えがある。

そんな知花竜海が、初めて出したソロアルバムが、この『新しい世界』だ。硬派なメッセージソングを予想したこちらの期待を軽やかに裏切る、アコースティック・ギターと三線の明るい音色。目の前にはあつと沖縄の海と空が現れたかのよつな開放感だ。「DUTY FREE SHOPP」は、

つである「ヒヤミカチ節」のことだ。戦後、焦土と化した沖縄で流行した曲で、何度でも何度でもエイッと立ち上げろ! (ヒヤミカチウキリ) という唄を陽気なお囃子と共に盛り上げる名曲。踏まれても踏まれても立ち上がる「不屈の民」の後ろには、いつも音楽が鳴っている。小さなことで挫折してはすぐ落ち込みがちな自分だけだと、ずっと続けてきた人はみな、こういう明るさを持っている。自由さを持っている。それにいつも励まされてきた。

3曲目の「ガジャングルサー」追いかけた日々で繰り返される「あれはフーヤたがヤーヤたがマーマが」という言葉。これは「あれは自分だったのかおまえたったのか何処だったのか?」という意味だ。軽快なメロディーとリズムの言葉は、何度も聴くうちにいつしか自分の鼓動と重なっていった。そのことを忘れてはいけないのがある。ジャケットの鮮やかな絵は、筋ストロフィーを思いついながら宜野湾市で自立生活を実践していた画家の新鮮な作品だ。鮮やかな色彩とパワフルな笑顔はこの音楽を相乗効果的に盛り上げる。しばらくはこのジャケットを部屋の一番良い場所に飾ろうと思う。

Gallery

ヤマヒデの絵葉書 「沖縄・辺野古 それでも、この海は生きています」

“この海のここが滑走路になろうとしています。大きなフェンスができてだけでも、海の様子が変わり始めています。私たちは生き物です” 辺野古の光り輝く海と浜。ミナミスナガニ。そして辺野古浜とキャンプ・シュワブを隔だてるフェンス。それぞれを見つめるヤマヒデこと、写真家・山本英夫さんによるフォト葉書。人に送って、見せて、売って…、この葉書を使って行動しよう、と写真家は呼びかける。



価格 9枚組み 600円 (送料別途)
発行・申込み フォトプラザ・ヤマモト FAX 03(5996)0779

ふえみん句会

原発0へ熱き人びと氷雨の中	ゆう子
小六月ボール蹴る子の高き声	のり子
夕暮に焼きいも売りの声高し	たか子
頼りとす氷雨の中にじむ灯を	ふみ子
川霧の孤高の釣師長き影	えい子
破れ蓮に寺の灯明ほのかなり	マヤ
街老し原発依存の秋哀し	まさえ
足下に木の葉舞ひ降り冬近し	よう子

次回、納めの句会は12月17日(月) 13時
ふえみんスペース(原宿)
興味のおありの方はどうぞのぞいてみて
ください。初心者歓迎です。
批評、ご批判もお待ちしています。